

九州大学新聞記事索引 二

<https://doi.org/10.15017/1498309>

出版情報：九州大学大学史料叢書. 20, 2014-03-31. 九州大学大学文書館
バージョン：
権利関係：

九州大学新聞記事索引 二

解 説

ここに紹介するのは、昭和二十三年三月二十日（第二七〇号）から昭和四十二年三月二十五日（五五四号）までに発行された『九州大学新聞』の記事索引である。この度、所蔵がみつからず長らく「欠号」であった第二七三号及び第二七四号を山本尚史氏¹がプランゲ文庫より発見、本索引に収録することができた。

戦前、九州帝国大学では新聞部部員である法文学部学生の入隊により、大学新聞は休刊を余儀なくされた。しかし、多くの大学では、用紙統制と言論弾圧などにより、学生紙は次々と休刊に追い込まれた。戦後も、新聞用紙の配給・割当てが継続され、昭和二十一年時点で何とか用紙の配給割当てを受けることができた大学新聞は、東京帝国大学と京都帝国大学だけであった²。こうしたなか、九州帝国大学（以下、九州大学）では、昭和二十三年三月二十日に第二七〇号より復刊した。

戦前の『九州大学新聞』及び『九州帝国大学新聞』は、法文学部法文会の編集のもとに発行されていたが³、戦後は、様々な学部より部員を募った全学的な「九州大学新聞会」により編集・発行されることとなった。復刊に際し、奥田譲総長は、「大学新聞はあくまで学生生徒をその対象とすべきである。特に社会に於ける学生の在り方に関し峻厳な反省と批判とを加へ、学生生活の□化と向上とを図るものでなくてはならない。そのためには何物にもとらはれざる自由の立場と批判的精神とを堅持して、あくまで高度の指導理念を追求すべきである。一言にしていへば、学生生活の啓蒙と進歩に寄与することこそ大学新聞

の使命であると思う」⁴（□は記事の文字がつぶれている為判読不可能）と祝辞を寄せている。

昭和二十四年には、福岡高等学校および久留米工業専門学校を統合して新制九州大学が発足した（九州大学との統合とともに九州大学福岡高等学校、九州大学久留米工業専門学校と改称）。さらに、その四年後には新制九州大学大学院が設置される一方、九州大学福岡高等学校と九州大学久留米工業専門学校は、最後の卒業生を輩出した後の昭和二十五年および二十六年に廃止となった。こうして、昭和二十年代中頃から後半にかけて、旧制の高等教育機関は幕を閉じ、新制の九州大学が本格的に始動した。その後、医学研究科（昭和三十年）、教養部（昭和三十八年）、薬学部（昭和三十九年）、歯学部（昭和四十二年）が設置され、高度経済成長期のなか学部・学科の拡充のもとに発展を遂げた。

『九州大学新聞』及び『九州帝国大学新聞』では九州大学全学の新聞とするために、「著しく九大的」⁵であることを目指して学生による投稿欄の充実をはかってきた。こうした同新聞の姿勢は、戦後復刊後も継承され、『九州大学新聞』では引き続き学生による『投書』欄が設けられた。

戦後復刊後の特筆すべき特徴は、学生の地域社会への関心であるといえよう。勿論、時代状況が彼らを突き動かしたという一側面があったかもしれないが、地域社会の実態に迫ろうとする学生達の強い意欲がうかがわれる。

例えば、板付基地は朝鮮戦争の勃発とともに米軍の最前線基地となり、ジェット機の発

着による騒音が九州大学をはじめ基地近隣で問題となっていた。同新聞では、この板付基地をめぐる問題に注目し、昭和二十八年二月十日の第三三〇号において、「板付の実態を衝く」と題する特集を組んでいる。同特集では、ジェット機の騒音に苦しむ月隈小学校の現状や、学童たちからの聞き取りによる生の声を掲載している。

さらに、「各界アンケート 各層に聞く板付基地撤退要求の運動」⁶では、九州大学、西南学院大学の教員の他、銀行員や会社員、飛行場要員などへも聞き取り調査をするなど、精力的な活動には目をみはるものがある。

また、三井三池炭鉱や筑豊炭鉱への同新聞の関心の高さも見逃せない。昭和三十年代の石炭産業の合理化にとまなう炭鉱労働者の大幅なリストラについて、昭和三十年六月十日の臨時増刊号⁷では、筑豊炭鉱の調査に参加した九州大学の学生の報告を掲載している。また、福岡県の依頼により結成された「中小炭坑離職者の生活実態調査」に同新聞部の記者も参加しており、炭鉱労働者の生活実態、日常生活など、彼らをとりにくく厳しい現状を伝えるルポルタージュを載せている⁸。

戦後の『九州大学新聞』（第二七〇―五五四号）では、学生らは大学から飛び出して実際にその地域に足を運んだ。そして、その地域社会が抱える問題の渦中に在る当事者に話を聞き、その実態について新聞をとおして公表するという努力がなされたところに一つの特徴がある。

とりわけ、板付基地や三井三池炭鉱および筑豊炭鉱の特集に関しては、福岡に位置している大学ならではの記事であるといえよう。そこには、地域社会が抱える問題に対する大学生らのまなざしと社会に対する告発が色濃

く映し出されている。こうした観点から考えると、『九州大学新聞』は福岡という地域が抱える問題を大学生はどのようにまなざしたのかを知る一つの手掛かりとなるといえよう。

（井上美香子 大学文書館百年史編集室 助教）

注記

¹ 九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻 博士後期課程。

² 河内光治『戦後帝大新聞の歴史』不二出版 一九八八年、京大新聞史編集委員会編『権力にアカンベエ！ 京都大学新聞の六五年』草思社 一九九〇年等を参照。

³ 詳しくは『九州大学 大学史料叢書』第十九輯を参照のこと。

⁴ 奥田謙「総長祝辞」『九州大学新聞』昭和二十三年三月二十日 第二七〇号

⁵ 南文一「新聞の一年―春から冬へ―」（昭和八年十二月二十日、『九州大学新聞』）、詳しくは『九州大学 大学史料叢書』第十九輯を参照のこと。

⁶ 『九州大学新聞』昭和二十八年二月十日 第三三〇号

⁷ 「暗いヤマの奥底から 中小炭鉱調査に参加して」『九州大学新聞』三七二号

⁸ 「ボタかげにあえぐ人々」『九州大学新聞』昭和三十四年十月十日 四三五号 臨時増刊